ああ、若き師よ

七月十日本紙「声」欄の加地武義氏の堀先生をしのぶ文は、真実のみがもつ感動の鎮魂歌であった。加地氏の幼時、放とうの父は逃げ、母は借金のカタに連れ去られ、一年後帰された時はすでに発狂、八歳と九歳の姉弟の三人暮らしは悲惨の極みであった。新任の堀先生は見かねてこっそり自費で援助していた。

子供なりにいろいろの内職をした。川底の砂利ふるいが一箱分二銭の手間賃で一番有利、姉弟はけんめいに働く。先生は「だれにもいうな」と、ほお被りで顔をかくし、宿直日以外は手伝った。加地氏はつづる。

「暮れなずむ境川の土手寒く、車に砂を積み終えた師と教え子の二つの影。それから一年、先生は病に倒れ不帰の人となった」それから五十七年、「惨苦の幼い日を思う。土砂にまみれた堀先生の面影は去らず、今も涙はやまない」と。

若き師の死は痛ましくも壮烈。吉田松陰は「教育とは相手に命を捧げることだ」といった。多くの教え子たちは松陰の命をたべて新しい日本をひらいた。

堀先生が加地氏に命を捧げたように、私たちは知らないうちにだれかの命をたべている。灰谷健次郎氏は名作「兎の眼」の中で、足立先生をしてこう語らしめている。

「先生のお兄ちゃんは何回もドロボーした。きょうだい七人もいたからツバメがえさを運ぶように何回もドロボーした。何回もつかまった。とうとう少年院送りが決まった。その日お兄ちゃんは死んだ。だから、先生はお兄ちゃんの命をたべて大きくなったんや」。「今の人はみんな人間の命をたべて生きている。戦争で死んだ人の命をたべて生きている。平気で命をたべている人がいる。苦しそうに命をたべている人もいる」

教育とは、福祉とは、このことの根源的自覚から出発するのでなければならない。

（一九八四年八月一日）